

---

# 魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

アーク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！畏を継ぎし死神

### 【Nコード】

N0699W

### 【作者名】

アーク

### 【あらすじ】

主人公の黒崎一護は魔帆良学園の中等部に通うごく普通の男だ少しウザい父と家族思いの妹達、そして幼なじみの明石祐奈に振り回されながらも毎日を過ごしていた。

だが、ある日を境に魔帆良の裏の世界に足を踏み入れてしまう。一護は守ると誓った人達を守る為に自分の秘められた力を使い、戦いの中に身を投じていく…

駄文ですが暖かい目で見守っていただけたら幸いです！

## 主人公設定（ネタバレ含む）

黒崎一護

「赤き翼」の一員だった父、黒崎一心の子供。

先祖代々、妖怪の血を引いており一護も例外では無く四分の一が妖怪の血である。

一護自身はそれを知らない。

また、一護は物凄い魔力を有しているが魔法は殆ど使えない。

容姿

B L E A C Hの黒崎一護と基本的には同じ

妖怪化した際には髪の色が白と黒に変化する。

家族

黒崎一心（父）

黒崎一護（息子）

黒崎夏梨（娘）

黒崎遊子（娘）

母親は海外に行った時に乗った飛行機で事故にあい、死亡した。

主人公設定（ネタバレ含む）（後書き）

感想お待ちしています！

## 一話（前書き）

香夜様、感想ありがとうございます！  
期待を裏切らないように頑張るので、これからも宜しくお願い致します！

## 一話

「ふあゝよく寝たな・・・」

今日は俺達が通っている魔帆良学園中等部の始業式だ。

「お兄ちゃん！ご飯出来たよ」お！遊子が呼んでるな・・・

「わかった！今行くぜ！」

リビングまで降り、扉を開けると・・・

「はっはっはっは！！お早うー護う！そして喰らえっ必さそ」うつせえ」ゲポアアツ！！」

朝っぱらからうつせえなこの親父・・・

思わず蹴り、顔面に入れちまったじゃねえか。

「一兄、危ないじゃん！こっち飛んで来たよ！」

「ああ悪い夏梨、でも避けたから良いじゃねえか」

まあ、壁にめり込んだ親父を心配せずに飯を食ってる娘つてのもあれだけだな・・・

「お兄ちゃん？早く食べないと祐奈さん来ちゃうよ？」

そうだった・・・さつさと食べねえとな。

そう思いながら、朝食をかきこんだ。

「ピポポ」

「はい？あ、祐奈さん！ちよつと待っててくださいね？」

祐奈の奴、今日来るの早くないか？

まあ、いいか！

「それじゃあ行つて来るぜ！」

「行つてらっしゃい、一兄」

「はっはっはゝ油断大敵だ」うつせえっ！！」

俺と夏梨のダブルパンチが背後から俺に襲いかかろうとした親父の顔を捉える。

「さすがは我が息子だ・・・これなら療暮らしも大丈夫そうだしハッ」

馬鹿が果てたみたいだが、どうでもいいか…

しかし、そう言えば俺って今日から療で暮らすんだっけ？すっかり忘れてたな

「バカは無視して・改めて行つて来るぜ」

「うん、行つてらっしゃい」そう言つ夏梨の顔もどことなく寂しそうだ。

「土日はこっちに帰つて来るから、そんな寂しそうな顔すんなよ、な？」と夏梨の頭に手を置いてやる。

「それもあるけど、一兄が居ないとあの馬鹿をどうしたらいいのになつて思つたら…」

あゝ…そっちか…

「ウザくなつたら殴つて構わん、親だろうが容赦はしなくていいからな？」

「分かつた！！」

よし、これで心配は要らねえだろ…

「行つてきまゝす」

「行つてらっしゃい」「妹達の声を背中で聞きながらドアを開けると…」

「朝から楽しそうだなやゝ一護の家は」

「こっちは良い迷惑だつての」

こいつは明石祐奈、家が近くて子供の頃から遊んでいた、まあ所謂幼なじみつて奴だ。

親どうしも仲が良いみたいで、家の馬鹿親父と祐奈の親父さんでよく飲みに行っている。

そして…お袋も同じだ…祐奈のお袋も、あの事件で死んでしまった…変な事思い出しちまったな。

「どうしたの？」

「いや…何でも無え」

過ぎた事を今更言つても仕方ないからな。

「ふゝん…なら良いや！ほら、早く行こつよ一護！」

「わかってるから、引つ張るんじゃないよ!」

笑顔で俺の手を引つ張ってくる祐奈…

俺はあの時に誓ったんだ…こいつのこの笑顔を守るって…

きつとお袋達も、そう願っているはずだ…

だから、俺は守る…こいつをもう二度と泣かせないようにするために…

それが、俺に出来る唯一の事だから…

「何してるの?置いて行っちゃうよ?」

「ああ、悪い!今行く!」



## 一話（後書き）

感想お待ちしています！

## 二話（前書き）

A S様、感想ありがとうございます！

## 二話

「そつえばさ・・・一護って部活入るの？」

部活か・・・考えてなかったな。

「まあ、色々見てから決めることにするぜ」

「ふん、それなら一護バスケ部入れば？」

「でも、中等部のバスケ部って弱いんじゃないか？」

「え！？」

何、私今知りましたみたいな顔してんだ？こいつ・・・

「知らなかった・・・」

「やっぱりか・・・」

こいつ何かと抜けてる所あるからな、悪く言うなら馬鹿ってどこか？

「馬鹿じゃないよ！！それに、言われるなら天然が良い！！」

「心を読むんじゃないやねえよ、それに天然も馬鹿も変わらねえだろ・・・」

「

「甘いね一護！！天然はステータスなんだよ！！」

「はいはい」

と、祐奈の発言を軽く流しているうちに男子中等部の校舎が見えて来る。

「そんじゃ、俺はこっちだから」

「うん、バイバーイ！！こっちにも遊びに来てね」

「いや・・・それは無理だろ」

男子の俺が女子の寮に行ったら、色々和不味いからな・・・

そして、祐奈と別れた俺は校舎に向かって歩き出した。

学校についてクラスに入ると「お早う！ーg「ウィース」グハアッ  
！？」

まず、最初に俺めがけて飛びかかってきたアホをリアットで瞬殺

してから、クラスを見渡していた俺の頭に「よう！一護！」という声と共に衝撃が走る。

この声は…こいつも同じクラスかよ…！

「痛ってえな！何しやがる恋次！」

「んだよ？そう怒んじやねえよ一護」

こいつは阿散井恋次、見た目は不良みたいだが付き合ってみるとなかなか良い奴だ。

「そういえば、一護お前今日女連れで学校来てたな？」

こいつ…要らん事を…！

今の言葉に反応した奴らからの、殺気が籠もった視線が痛い程俺に刺さる。

なんかこれから大変そうだな…俺…

それから色々あったが、今俺は始業式で学園長の話を聞いている。

しかし…「長え…」

話に三十分かけるとか有り得ないだろ！

「頭がか？」どうやら恋次に俺の呟きが聞こえていたらしい。

「それもあるが、俺が言ってるのは話の方だ」

まあ、確かに頭長いけどな…ぬらりひょんかったの！

「それでは、これで始業式を終了する！」

やっとかよ…しかし、長かったな

「なあ、一護？」

「なんだ？」

「お前この後どうするよ？」

どうするって言われてもな…やる事と言えば、とりあえず…「部活見学に行くかしんねえ」

「そうか、んじやあ気が向いたらサッカー部に来いよ！」

そう、こいつはサッカーが滅茶苦茶上手い。

だから、中学入ったらサッカー部に入ると決めていたらしい…

「ああ、分かった」

そして、学校が終わった後俺は部活を見て回る事にした。  
結果…「決まらねえー!!」

見るのに夢中になりすぎて、全部を見る事が出来なかった…orz  
しかし、どうしようか…

考えながら寮に向かって歩く、俺に…

「キヤーツー!!」

と、どこか聞き覚えのある声で悲鳴が聞こえた。

この声…祐奈かつ!?

そして、俺は悲鳴が聞こえた方に向かって走りだした。

この時、俺は知らなかった…

この夜の出来事で俺の運命が大きく変わることを…

## 二話（後書き）

感想お待ちしてます!!

### 三話（前書き）

獅子丸様、ゆや様、感想有難う御座いました！  
後、この後アンケートがあるのでご協力お願いします！

### 三話

(side 祐奈)

「あゝ疲れたあ！」

やつぱり部活はバスケットにしようかな？

一護は弱いつて言ってたけど・・・私が頑張つて強くすれば良いんだもんね！

でも・・・「もう夜かあ」

こういう夜の日って何か出たりするのかなあ？

「ガサツ」

「えっ・・・？」

う、嘘・・・でしょ？「お、鬼！？」

そう、今私の前に出てきたのは子供の頃に読んだ事のある絵本とかに描いてある鬼その物だった・・・

「なんや？姉ちゃん？ワシが見えるんか？」

に、逃げなきゃ・・・！

でも、体が動いてくれないっ！足も震えてる・・・

「堪忍してや？嬢ちゃん・・・見られたら殺さなきゃいかんのや」

私の目の前に立った鬼がゆっくりと手に持った包丁みたいのを振り上げた・・・

「キヤーツ！！」

助けて・・・一護！！

そう願っても来てくれるわけないか・・・と私はゆっくり目を閉じた・・・

私、死んじゃうのか・・・お父さん、ごめんね・・・

一護・・・私、一護に言おうと思ってた事言えなかった・・・

でも、私を襲う筈の痛みは全然来る気配がない・・・どうしたんだろ？

そして、目を開けた私の前には、望んでいた人がこっちを向いて笑



っていた。

でも・・・「つたく・・・まあ、無事で良かったぜ・・・」その人は私をかばって鬼に斬られていた...

(side out)

(side 一護)

助けたはいいが...俺が斬られちゃ世話無えか...

あゝヤバイ...かなり血出てんな...意識飛びそうだ...

俺は立てなくなり、地面に倒れる。

「い、一護つつ!!」倒れた俺に祐奈が駆け寄って来る。

「ごめんね...私の...私のせいで」と言う祐奈の目から涙が落ちる。

...何やってんだ俺はつつ!!..!

あの時...こいつを泣かせないって...そう誓ったじゃねえか!!..!

たとえば俺が果てようが、こいつを...こいつをつ!!..!守らなきゃいけねえんだつ!!..!

震える足に力を入れ、ゆっくりと立ち上がった俺の体が不意に熱くなる。

まるで...俺の中の血が熱くたぎっているみたいだ。

「な、なんや兄ちゃん!? あんた何者や!!..!

鬼がこつちを見て驚いている。

理由は知らんが...「祐奈...怖かったら目え瞑ってな?」

これからやる事をこいつに見せる訳にはいかねえ...

祐奈が目を瞑ったのを確認して、鬼の方に向き直る。

不思議だ...力が湧いてくる...これなら!

「覚悟しろよ、テメエ!!..!

「なんや知らんが、やらな殺られるって訳やな!!..!

覚悟を決めた鬼は俺に包丁を振り下ろしてくる。

だが、遅い...まるでスローモーションを見ているみたいだ。

難なく攻撃をかわした俺はカウンターで拳を鬼の顔面に叩き込む。

「ぐあつ!!..!なんや兄ちゃん強いやないか...まるで百鬼の長、ぬらりひょんやで...」

「人を妖怪扱いしてんじゃねえよ」

「何言つとんのや？ そんないきなり髪伸ばしておいて何が妖怪じゃないんや？」 「は！？」 髪が伸びているだと！？」

「ほれ、見てみい」 鬼がどこからか出てきた鏡を見ると…

髪が伸びた上に、色も橙から白と黒に変わっている。

つてか、こいつ鏡どつから出したんだ？

「そこら辺は気にしたら負けやで兄ちゃん？」

「心を読むんじゃねえ！！ サトリだろお前本当はっ！？」

「鬼やで？ 真正銘のな？」

なんか… 戦う気無くなってきたぜ…

しかし… こいつそんなに悪い奴に見えねえな… まあ、斬られたのはあれだがな… と考えている俺に鬼が声を掛けてきた。

「兄ちゃん、悪いけど時間や…」

「は？ なに言つて…」 途中で俺は言葉を止める…

何故なら、鬼の体が徐々に消え始めていたからだ。

「… お、お前…」

「悪かったのう、兄ちゃん… ワシもこないな事したくないんや… せやけど命令されたら従わないかんねん…」

こいつ… 本当は優しいんじゃねえか…

そして、俺は自然に鬼に右手を差し出していた。

「なんや？ この手は？」

「握手に決まってんだろ？」

「はははっ… ほんまに面白いなあ兄ちゃん！」

笑いながら鬼が俺の手を握ろうとする。

が、それはどこからか飛んできた一発の銃弾が鬼の頭を貫通する事で阻まれた。

「は…？」 一瞬何が起きたのか分からなかった。

だか、目の前に居た筈の鬼が消えたという事を理解した俺に徐々に怒りが込み上げてくる。

「誰だ…今、銃撃ちやがったのはあああああつつつつつ…!!!!!!」  
「!」

### 三話（後書き）

アンケートの内容ですが、一護を女子のクラスに入れるか、それともそのまま男子のクラスで過ごすか？というものです。

女子のクラスに入りたい！という人は、1を

そのまま男子のクラスで！という人は、2と

書いて下さい！

宜しくお願い致します！

期限は、今日から4日後でお願いします！

後、感想お待ちしております！

#### 四話（前書き）

アンケート途中経過！

1、六票

2、一票

となっています！

A S様、香夜様、ゆや様、reina様、煌焰様、寒月牙斬様、獅子丸様、ご協力ありがとうございました！

他の皆さんもアンケートもあと少しで締め切りなのでご協力下さい！

## 四話

「誰だ、今銃撃ちやがったのはああああつつつつ！！！！！！」  
俺の怒声と共に体から抑えきれない殺気が放たれる。

確かにあいつは危害を加えたかも知れねえ…だからって問答無用で殺す事はなかったはずだ…

やりやがった奴等は隠れてるつもりらしいが…

「バレてんだよ！！そこにいんのはよお！！」

今の俺は妖怪化（？）しているせいか、目が異常な程に良くなっている。

だから、林の影に隠れている奴等が普通に見えている。

そして、隠れていた二人組が出て来て二手に別れ、走り出した。

一人は俺に、もう一人は…

なるほど、まずは祐奈を安全な場所に逃がそうってか？

まあ、そっちの方が都合が良いぜ…

「お前が俺の相手って事で良いんだよな？」

と、俺の前に立っている野太刀を持ったサイドポニーの女に声を掛けた。

「何が目的だ…？」

「目的…だど？んなもん無えよ」

「嘘をつくなっ！！狙いはお嬢様だろう！！」

お、お嬢様？…誰？

何かこいつは勘違いしてんな、絶対…

「喰らえっ！！神鳴流奥義、斬岩剣っ！！」

げっ！？問答無用かよっ！？

慌てて避けると、さっきまで俺のいた場所が吹き飛んでいた。

「おいテメえ！！危ねえだろうが！！」

「黙れ妖怪っ！！」

くそっ！！このままじゃちがあかねえ！！

女に手を上げるのは気が引けるが…しょうがねえか…

まずは…「その剣を渡して貰おうか？」

「なにっ!？」俺の言葉に女が動揺している隙を狙って剣を奪う為に猛スピードで接近する。

「そうは行くかつ!! 神鳴流奥義っ!!」

俺とこいつ…どっちが早いかっ…!

そして俺と女の剣がぶつかり合う直前に、どこから誰かが割り込んで来た…

そいつは俺も良く知っている顔だった…

俺の拳を片手で受け止め、女の斬撃を刀で受け止めているそいつは…

「れ、恋次!？」俺の親友の阿散井恋次だった…

「誰だ!？お前はっ!!」

「あん？テメエこそ誰だよ？」と、恋次は怒鳴っている女を面倒そうに見ている。

「邪魔をするならば容赦はしない!!」「そうかい、そんなに死にてえなら別に止めねえが？」その声と共に恋次の体から凄まじい量の殺気が溢れだす。

す、すげえ…さっきの俺より迫力あるぜ…

「貴様…妖怪をかばうとはっ!!」「はあ？てめえが言えた事かよ混じり物が」

「っ!!」

恋次の挑発で、明らかに女が怒り始めた。

「貴様ああつつっ!!!!」激怒した女が恋次目掛けて切りかかって来る。

「一応忠告しておくが…頭に血が上つてると相手の実力をはかり間違えるぜ?」

そして、恋次が俺の目の前から消えたと同時に女が吹き飛ばされる。

「っ、強え…」啞然としている俺の前に恋次が戻って来る。

「なに、ボ…ッとしてんだよ!行くぞ一護!」

「ど、どこにだよ!」

「俺達の部屋に決まってるだろうが！それに…お前に客も来てるしな…」



## 四話（後書き）

感想お待ちしてます!!

## 五話（前書き）

A S様、感想ありがとうございます！  
連投なので出来が心配ですが…

## 五話

客って・・・一体誰だ？

恋次に連れられ、部屋のドアを開けると、そこには予想もしていなかった奴がいた・・・

それは・・・「お、親父っ!？」

「よう、一護」とこっちを見て手を上げて笑っている親父だった。

「連れて来ました、一心さん」

「ああ、ご苦労だったな恋次」

あれ？この二人って知り合いだったか？

「ってか、二人で話進めるんじゃないやねえよ!!」

「わかってる、そう焦るな一護・・・」

・・・こいつ本当に親父か？いつもとまるで雰囲気の違い・・・

「それじゃあ話すが、まず一護・・・魔法を信じるか？」

・・・あ、そういう事か！

「悪い!!親父っ!!俺が殴ったり蹴ったりしたから、ついに頭がおかし」  
「なつてねえっ!!」  
「ぐはあっ!？」

親父のパンチを顔面に喰らい俺は壁に叩きつけられる。

「ったく・・・もう面倒だから魔法があると仮定して話をするぞ？」

「お、おう・・・」

「まずは、もう気づいただろうがお前は妖怪だ」

「やっぱそうなのか・・・」

「そして、俺もだ」

「親父もか!？」  
「ああ、ただし俺は二分の一が妖怪の血でお前は四分の一が妖怪の血だ」

それって・・・夏梨達にも!？」

「夏梨達は心配無い・・・血が薄まっていて影響は無い」

「そっ...か」  
「良かった...!」

「さて、ここから魔法の話だ...」

それからの話は俺を驚かせるばかりだった…

「…簡単に言うと、こういう事か？親父は魔法世界で大戦を終わらせた紅き翼の一員で、しかもぬらりひょんでかなり強かったと？」

「まあ、そんなところか」

親父が…英雄で妖怪ねえ…なんか複雑だな。

「それでだ、一護」

「なんだよ？」

「お前は どうしたい？」

「どう…したいか？」

俺は…もう二度とあいつを泣かせる訳にはいかねえんだ…！だから…

「俺は強くなりてえ…守りたい奴を守れるように…！」

「そうか、なら鍛えてやる…付いてこい」

親父に言われ、ついて来た場所は…

「ログハウス？」俺の側で恋次が震えているのが気になるな…

「どうした？恋次？何震えてんだよ？」

「直ぐに分かるぜ…」

どういう意味だ？と聞く前に親父がドアをノックする。

そして、出てきたのは…

「どうぞ黒崎様、マスターが奥でお待ちです」

「おう、済まん茶々丸」

「ロボットっ！？」あれ、どう見てもロボットだよな？

「おい、一護！置いていくぞ！」「ちよっ！待てって…！」

そして、親父達の後についてログハウスの中に入ると…「一心、随分と久しぶりだな？」

「ああ、そうだなエヴァ」

親父と会話をしている金髪の女の子がいた。

## 五話（後書き）

感想お待ちしてます!!

## 六話（前書き）

アンケートの結果ですが…

一護を女子のクラスに入れることが決まりました！！

アンケートに協力してくださった皆さん、本当にありがとうございます！！  
ざいました！！

後、獅子丸様、小元数乃様感想ありがとうございました！！

ちゃんと、ご指摘通りになっていると良いんですが…

それと、今回はかなり短いです…

## 六話

「ほう？そいつがお前の子供か？一心」

「まあ、そういう事だ」

「というか…誰？この子？…まさか、あれか！？隠し子とかそういう

…！？

「「違うわ、このボケがああ！！」」

「だから、心を読むなっ！ぐああっ！？」

俺に本日二度目の顔面へのWパンチがクリーンヒットし、吹っ飛ばされる。

…あの子、意外に力があるじゃねえか…！

「あれか？お前の子供は受け継いではいけない所だけ受け継いだのか？」

「違えよ！ってかそれって遠まわしに俺の事を馬鹿って言ってるよな！？」

「別に私は間違ったことは言っておらんが？」

畜生…完全に舐められてる…

「っていつか、親父！！この子誰だよ！！」

すっかり馬鹿騒ぎで忘れてたぜ…

「ん？こいつはエヴァンジェリンA・K・マクダウエル、現在60歳の吸血鬼だ」

へえ…600歳ねえ…ずいぶんとご長寿なことだ…

「…は？600歳って…ババ…」

「死にさらせえっ！…！！」

「ゴッハアッ！？」

いや…マジで痛いからっ！！パンチを顔面に叩きこまれると…！

「全く…躰がなっていないな！」

「パンチ顔面に叩き込むババアに言われたくねえな…！」

あ…しまった…またババアって言っちゃった…！！

「ほーう？そうかそうか…そんなに自分の血の雨が見たいのか…？」  
「いやいやいやっ！？何その剣っ！？そんなの振り下ろしたらっ…！？」

「マスター、別荘内でお客様がお待ちですから…」

「むっ…そういえばそうだったな」

茶々丸の言葉でエヴァンジェリンの剣が俺の目の前でギリギリ止まった。

助かった……のか？

だが、それはエヴァンジェリンがこっちに向けた笑みで間違いだという事に気がついた。

「続きは向こうで殺ろうか？」

その言葉を聞いた俺は回れ右をしてその場から逃亡を図ったが、当然上手くいくはずもなく…

「やめろっ！！放せっ！！」

「うつせえ！！とつとと逝くぞ！！」

「字が違えええつつっ！！！！」



## 六話（後書き）

感想お待ちしてます!!

## 七話（前書き）

獅子丸様、雪門様、感想ありがとうございました!!

## 七話

恋次に無理やり引きずられ、ついたのはエヴァ（エヴァンジェリオンって言うのが面倒だから俺が勝手に省略した。）の家の地下だ。

「こんな所で修行すんのかよ？」

「ケケツ、チゲエナ…ヤルノハゴ主人ノ別荘ノ中ダゼ」

……ん？今の声誰の声だ？

慌てて周りを見回した俺の目が壁の近くにある一つの人形を捉える。まさか…「これか？…いやいや人形が喋るわけないか…」

「トコロガ喋レルンダナ、コレガ」

と、俺の前にある人形の口が動き喋り始める。

…魔法って本当に何でもありだな、おい…

「ん？何だチャチャゼロか？いたのかお前？」

「ケケツ、ナニ言ツテヤガル？モトモトハゴ主人ノセイダロウガ」

「はっ！そう言えばそうだったな？封印のせいでお前は動けないんだったか！」

なんだこいつ、なんか呪いでも掛けられてんのか？

試しにエヴァに聞いて見ると、予想していなかった答えが返ってきた。

「私に掛けられている呪いはな…登校地獄の呪いだ」

…はぁ！？何そのシヨボい呪い！？

「そのせいで私は13年間中学生をやっているんだ…全く忌々しい…！」

「え…と……ドンマイ（笑）」

「今、お前他人事だと思っただろっ！？」

「イエイエ、ベツニ…」

チャチャゼロのようにに片言になりながらも必死に視線をエヴァと合わせないようにする。

「ふん、まあいい…とりあえず行くとしようか？」

と、エヴァが奥から引つ張り出してきたのは…

「あゝ… やっぱ見た目はガキだからそういう玩具で遊びたか」ならんわボケっ！！」ぐはあっっ！！」

いや…マジで痛いって！！仮にも女の子なんだから蹴りは止めろって！！

「まあ、馬鹿には見せた方が早いかな？おい…一護ちよつとこっちに  
来い」

なんだ？なんかあるのか？

そう思いながら、エヴァが出してきた玩具のような物の前に立った瞬間に目の前の風景が変わった。

「うわ！？な、何だここ…」

そこに広がっていたのはリゾートのような光景だった。

「ここはダライラマ魔法球と言ってな、ここでの一時間は外の日になるという優れ物だ」

いつの間にか俺の横に来ていたエヴァが説明した。

「へ…随分と便利だな」

「でも、ここに女の子が入ると老けやすくなるんだって…！」

「そいつはご愁傷様…って！？」

後ろを振り向くとそこには俺も良く知っている奴がそこにいた。

「ゆ、祐奈っ！？」

「ヤッホー一護！！」

な、何でこいつがここに…！？

「私が連れて来たんだ」

「はあ！？何勝手に…」

「違うの一護…私が頼んだの…」

祐奈が頼んだ？いったいどういう事だ？

「簡単に言つとな？お前は一心から魔法は隠す物だということは聞いただろ？」

その問いに俺は頷いた。

「明石はな、魔法の存在を知ってしまったただろう？だからこの町の

正義の魔法使い共が、こいつの記憶をいじるかそれとも…というところでは私が面白そうだったからこいつを預かったという訳だ…まあ、本人も強くなりたかったらしいしちょうど良いだろ？」

…こいつが決めた事だ…俺が口を出す義理は無い。

だが、どうなるうが俺がこいつを守るって事には変わり無え…そのために俺は強くなるって決めたんだ！！

「わかった、じゃあエヴァ…そいつを頼んだ」

「この私が鍛えるんだ、強くなるに決まってるさ！！」

さて、祐奈はエヴァに任せるとして…

「さあ、親父…とっとと始めようぜ！！」

「ふっ…そうだな…それではまず畏を習得してもらおうか？」

畏…？なんだそれ？

「まあ、わかるように説明してやる…まずはだ…妖怪がする事は何だか分かるか？」

「…人をビビらせる事じゃねえのか？」

「その通りだ…個々の妖怪には人々を恐れさせる特徴がある…例えば俺たちぬらりひょんは…」

その言葉が終わると同時に親父が俺の目の前から消えた。

「はあ！？き、消えた！？」

「消えてねえよ！目の前にいるだろうが！」

その言葉と共に再び親父が目の前に現れる。

「これが…畏…」

すげえ…これを覚えれば…！！

「よし、一護…早速妖怪化してみろ」

「ああ！！」

よし………

あれ？そう言えばどうやったんだっけ？

「自分の中の妖怪の血をたぎらせる感じだ」

「おお、サンキュー！！」

んじゃあ、もう一回…

自分の血をたぎらせる感じで…

「ゾオオオツツ」

俺にあの時と同じ力が湧いて来る。

「やりやあ出来るじゃねえか」

「ああ、悪いな…手間かけてよ…」

「はっ！急に偉そうになったな一護？」

「無駄口は良い…とっとと始めるぞ親父」

試しに親父がやった技をやってみたが…

「できねえ…」

どうやってんだよ！？全然分からねえ…

「心を落ち着かせろ…そして、その状態で相手を威圧しろ」

…心を落ち着かせて…そして威圧するっ！！

俺が今出せる限りの殺気を親父にぶつける…

「…ほ…う…やりやあできるじゃねえか…いいか一護、俺たちぬらりょんはその畏を明鏡止水と呼んでいる。」

「明鏡止水…か…だが、これだけだと…」

「分かっているさ、だからこそ俺たち妖怪は次の段階に進むんだ」  
次の…段階だと？

「それは相手の畏を断ち切る技だ、その名は鏡花水月…まあ、今回はそう簡単に行かないかもな？」

「それを覚えれば俺はもつと強くなれるんだろ？だったら覚えるさ…死ぬ気でな！！」

そして、俺の修行が再び再開された…

## 七話（後書き）

感想おまちしてます!!

## 八話（前書き）

獅子丸様、感想ありがとうございます！！

後、最近多い質問で織姫などの女性キャラを出すんですか？？とあるんですが…

すいません…出しません…

ですが、二人ぐらいbleachから男性キャラが出てきますので楽しみに待っていてください！！



## 八話

「ガキン、ガキン!!」

「うおおおっ!!!」

「はあああっ!!!」

剣と剣のぶつかり合う音が辺りに響きわたる。

その音を発しているのは言うまでもなく俺と親父だ。

「畏を技として昇華しろ」

と、親父に言われたものの俺はその手掛かりすら得る事は出来なかった。

くそ…確かに簡単には行かなそうだ。

「おらっ!! 考え事とは余裕だな一護っ!!」

「しまっ…」

「ドゴオオン!!」

考え事をしていた俺は親父に容赦無く蹴り飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ふう…もう一つヒントをやろう…ぬらりひょんはどんな妖怪か、それが分かれば鏡花水月を習得出来る手掛かりになるはずだ。」

ぬらりひょんがどんな妖怪か…?

考えた事もなかったな…

「まあ、外にでも行つて気分を切り替えてくると良さ…あ、後、外に行く時でも妖怪化を解くんじゃねえぞ」

「ああ、分かった。」

そして、俺は親父に言われた通りに外に出て気分を切り替えることにした。

外に来たのは良いが…

「やる事無え…」

行くあても無く俺は町をぶらついてた、俺が修行している間に雨が降ったらしく辺りは水たまりがある。

その中の一つに俺の目が惹きつけられた。

「あれは…」

それは、水たまりに映っている月だ。

それを見た俺の頭にある光景が蘇ってきた。

「確か……」

（六年前）

「わっお母さん！！見て見てっ池に月が映ってるよっ」

「あら、本当ねっ一護」

嬉しそうに池に駆け寄って行く俺をお袋は笑いながら見ている。

「あれ？消えちゃった…」

俺が池に手を入れると、それまで映っていた月が消えてしまった。

「ふふっ、一護…手を抜いてしばらく待ってみなさい」

お袋に言われた通りにしてみると、池に再び池に月が映った。

「わっ凄い！！この月って見えるけどここには無いみたいだねお母さん！！」

「そうね、鏡みたいね…まだ一護にはわからないかも知れないけどこれを鏡花水月って言うのよ」

「きょーかすいげっ？」

そつえば…こんな事あったな…

鏡花水月ってどっかで聞いた事あると思ったら…あの時か

「そこにあるようでそこじゃない…か」

もしかしてこれが鏡花水月の手掛かりなのか？

そんな事を考えながら歩いてた俺の耳に何か言い争うような声が

聞こえてきた。

その声が聞こえてくる方を見ると、三人の女の子に何やら絡んでいる不良共がいた。

はあ… ああいうのまだいやがったのかよ？

呆れながら見ていると、女の子の一人が不良を突き飛ばし逃げて行く。

あゝあ… あれはちょっとヤバいかもな…

逆上した不良共が女の子達を追いかけて行く。

しゃゝねえな… 助けねえと色々ヤバそうだな…

急いで追いかけて行くと不良に追い詰められ、絶体絶命の女の子がいる。

どうやら、女の子の中のボーイッシュの子が足をくじいたらしく動けないでいる。

しかも、不味い事にさつき不良を突き飛ばした子だった。

「生意気なんだよっ！！このガキが！！」

不良の中の一人がその子を殴ろうとするが…

それを俺が腕を掴んで止める。

「あん！？何だ「はい、おやすみなさい」」ゲポアアッ！？」

そいつを殴り飛ばすと、間抜けな声を上げて吹っ飛んでいく。

「あ、あっちゃん！？」

「テメエっ！！よくもあっちゃんをつ！！」

あっちゃんって… ネーミングセンス無えな、おい…

ん？あの子達も俺と同じ事を考えてそんな顔してんな…

「おい、テメエ！！俺達ワイルドスターズに手え出してただで済むと思うんじゃねえぞ！！」

「「うわゝ… ネーミングセンスが…」」

俺と殴られそうだった女の子の声がハモった。

「うるせえ！！ほっとけ！！」

自覚があるみてえだな… まあなかったら…

ご愁傷様って事で…

「やつちまえっ!!」

「「「おうっ!!!」」」

さて…掃除の時間だな…

(五分後)

「は〜終わった終わった〜」

不良共を五分足らずで愉快的オブジェ(死体)にした俺は女の子達の方を向いた。

「大丈夫だったか? あんたら?」

「「「……………」」」

ん? 反応が無い…ただの屍のようだ…ってそんな訳無えか…

「おい!! もしも〜し!!」

「は、はいっ!」

「やつと反応したか…怪我無えか?」

「あ、はい…」

と言いながら立とうとする女の子の顔が歪んだ。

「痛っ…」

「なんだよ、怪我してんなら無理すんなよ…ほら、背負ってやるからこつち来な?」

「えっ!?! そんな事…助けてもらっただけでも悪いのに…」

「円く遠慮しないで良いよ〜その人に送ってもらいなよ〜」

「そうそう!! 私と美砂は先生とかに連絡しないといけないし!!」

よし、話もまとまったみたいだし…行くとしますかね…

「そ、そんな…」

ん〜…面倒だから…………無理やり背負うか?

「よいしょっと」

「キヤっ!?! / / /」

背負われるのは嫌だろうから…抱きかかえることにした。

まあ、どっちも嫌だろうがしょうがないか…

「そんじゃあ、寮に送るって事で良いよな?」

「は、はいっ」

そして、残った二人に気を付けるように言ってから女の子を抱えて去っていった。

その後

「あつ！名前聞くの忘れたあつ！」「と残された二人が叫んだ事を俺は知る筈もなかった。

(円side)

「あ、あの…恥ずかしいんですけど…」

「嫌だろうけど我慢してくれ」

…嫌というか、むしろ…

はっ！！何考えてるの私！？

た、たしかに、助けてもらった時はかっこいいと思ったけどっ／／

顔がどんどん赤くなっていくのが自分でも分かる。

「ん？顔赤いけど、大丈夫か？」

そう言った男の人が心配そうに顔を近づけてくる…

ち、近いっ！！！！／／／

でも、近くで見ると余計かっこいいな……

彼女とかいるんだろぅな」と言うかいないと可笑しいでしょ。

聞いてみようかな…？

「あ、あのっ！！」

「ん？どうかしたか？」

「な、名前教えてもらっても良いですかっ！？」

恥ずかしくて別の事聞いちゃった…流石に初対面の人に聞く内容じゃないし…

「黒崎一護だ、そっちは？」

「釘宮円です、あの、さっきは助けてくれてありがとうございます」

た黒崎さん！」

「さんはいいぜ、同い年っぽいし…一護って呼んでくれ」

え…？こんなに大人っぽいのに私と同い年なの！？意外だな」

「それじゃあ…一護君で良いかな？」

「ああ、良いぜ、よろしくな円」

「うん、よろしくね一護君」

(一護side)

「帰ったぜ」親父」

「おう、遅かったな一護」

別荘に帰ってきた俺を待っていたのは親父と恋次だった。

「どうだ、一護…なにか掴めたか？」

「さあ、どうだろうな？まあ、少なくともぬらりひょんがどんな妖怪かは分かったけどな」

「ほう…それじゃあできる筈だよなっ！！」

と、親父が切りかかってくる。

だが、俺はそれを避けない…いや、避ける必要が無い。  
なぜならそこに…俺はいないからだ。

そして、親父が俺の幻覚を切り裂いた直後に後ろをとる。

「鏡花水月…」

この技は相手の認識をずらすことで相手を攪乱する技だ、そう、あの時の月のようにそこにいるようにでない…それがこの技の本質だ。  
「はっはっは」いや驚いた…まさかこんな短期間で明鏡止水と鏡花水月を会得するとはな…さすが俺の息子と言ったところか…」

「これで、修行は終わりか？」

「いや…これからが本番だ」

その声と共に親父の持っている刀が俺の腹を貫いた

## 八話（後書き）

上手くかけたかどうか…（汗）

感想お待ちしております！！

## 九話（前書き）

雪門様、ニッコリ様、感想ありがとうございました！！

p v 3 0 0 0 0 突破致しましたっ！！  
皆様ありがとうございました！！



## 九話

「お、親父？」

俺は自分の目が信じられなかった。

だが、現実には変わらない…

そう、現実には俺の腹を親父の刀が貫いている…ただ、それだけだ。

「テメエ…っ！？何しやがるっ！！」

そう言っただ後に俺は気付いた…

「痛く…ねえ？」

そう、全くと言って良い程に痛みが無い。

むしろ、俺の中に何かの力が流れ込んでくる。

畏とは違う何かが…

「ドオオオオツツツ！！！！」

俺を中心にもの凄い爆発が起きた。

（恋次 side）

…… 上手くいったのか？

最初に一心さんから聞いた時はとんでもねえと思ったが…鬼が出るか蛇が出るかだな。

ん？土煙が晴れてきたな…さあ、どう…

…… 俺は目の前の光景が信じられなかった

一心さんの計画は確かに成功した…

だが、明らかに異常すぎる…

「ふう、なんか変な感じだな…」

「変なのはお前だ一護っ！！何だそのバカデカイ刀は！？」

一護が持っている斬魄刀は明らかに大きすぎる…

「ん？何だこれやっぱデカイのか？」

「当たり前だっ！！」

俺のやつの二倍はあるぞ！？  
こりゃ…鬼も蛇も両方出てきちまったんじゃないのか？

(一護 side)

ん…？恋次の奴が何か失礼な事を考えている気がしたが…気のせい  
か？

だが、そんな事は置いといてだ…

「俺に何したんだ、親父？」

「なに、新しい力を与えてやっただけだ」

「いやいやっ！？偉そうに言ってるけど下手したら俺死んでたから  
な！？」

「いや、大丈夫だ、死ぬ事は無えって分かってたからな」

…は？何言ってるんだこいつ？それにこのバカでかい刀の事も聞いて  
ねえし…

「まずはだ…恋次…こいつに見せてやれ」

「わかりました」

と、恋次が刀を抜き…

「吠えろっ！蛇尾丸っ！！」

と、叫んだ瞬間に恋次の刀の形が変わった。

「おゝっ！！凄えな」

何か手品みてえだな…

「これが、始解って奴だ」

「始解…？」

「ああ、俺が持つてる斬魄刀やお前が持つてる斬魄刀にはそれぞれ  
名前があるんだ、俺の場合は蛇尾丸って名前だ、その名前を呼ぶこ  
とでその斬魄刀の力を引き出す…それが始解だ」

それじゃあこの斬魄刀にも名前があるって事か…

「よし、んじゃ早速修g「ちよつと待て」んだよ？」

何で止めんだ？親父の奴…

「修行はお預けだ」

「はあ！？何でだよ！？」

「テメエは学校だろうが！！」

「……………やっべ忘れてたっ！！」

「ふん、私としては学校に行かずに鍛えてやつても良いんだがな」

「いやいやっ！？それ以上やったら祐奈が死ぬからな！？」

「死ぬ直前までやるのが修行だろう？」

鬼だ……………

俺も修行の合間にエヴァと祐奈の修行を見たが…

鬼畜以外の何者でもなかったな。

まあ、修行内容は簡単だ…エヴァの撃つ魔法をひたすら避けるって  
もんだ。

最初聞いた時は随分簡単だ…と思ったが…

見た瞬間、目が点になったな…うん…

だって、絶えず百発以上の攻撃が襲って来るんだぜ？死ぬっての普通…

エヴァが言うには「体力作りの一環」らしいが…

でも、間違い無く体力は上がってるな…

ってか、上がってなかったら可笑しいだろ。

「も、もう一步も動けない…」

「ご愁傷様としか言いようがねえ…」

そして、バテた祐奈を女子寮まで送り（明鏡止水は勿論使った）俺  
達は自分達の寮に戻った。

そして、次の日…

まだ、あれから一日しか経ってねえんだよな…未だに信じられねえ…  
と、俺が教室で一人考え込んでいると…

「ピンポンパンポン…」  
「Aの黒崎一護君、阿散井恋次君、学園長  
室に至急来てください」

「はあ？何かしたつけ？俺？」

「行ってみねえと分かんねえだろ？」

「まあ、そうだけだよ……」

そして、俺と恋次は学園長室に向かう事になった。

「なあ、恋次……」

「あん？」

「明鏡止水使っちゃ駄目か？」

「気持ちに分かるが……使うな」

何故俺がそんな事を聞いたか……それは学園長室が女子のエリアのど真ん中にあるからだ。

何かクラスの奴らが羨ましそうな顔してたが……こういう事がこれじゃあ、いつ不審者扱いされるか分からねえぞ……？  
と、俺が考えていた矢先……

「ちよつとアンタ……！ここは女子校よ……！何で男がいんのよっ……！」  
後ろから誰かに怒鳴られる。

後ろを向くと、両目がオッドアイで鈴の髪飾りを付けた女の子が俺達を睨み付けている。

「学園長に呼ばれたから、仕方ねえだろ？」

「そんな事言つて、変な事するつもりでしょ……！」

「恋次……！助けてくれっ……！」

これ以上言つても聞かなそうだから恋次に助けを求めるが……

「知らん、勝手にやれ」

「薄情者っ……！」

くそっ……！どうすればっ……？

助けを求めて辺りを見回すと、見覚えのある顔を見つけた。

丁度いいことに、あっちも俺達を探していたようだ。

「タカミチ……っ、助けてくれ」

「何してるんだい？一護君に阿散井君……？それに神楽坂君も」

この、シブい人は高畑・T・タカミチ、俺の親父の飲み仲間だ。

ガキの頃によく遊んでもらっていて、仲が良い大人の一人だ。

助かった〜っ！！

俺は早速事情を説明し、タカミチの「彼らは本当に学園長に呼ばれているんだよ」発言で

神楽坂とかいうやつもタカミチの言葉で納得したようで…

「勘違いしてごめんなさいっ！！」と、素直に謝ってくれたので「いいぜ、別に気にしてねえからよ」と、許す事にした。

そして、神楽坂と別れ、タカミチの案内で学園長室に向かった。

その途中で、「何で学園長室って女子のエリアのなかにあるんだ？」と聞くと、

「あはははは…」と笑ってはぐらかされた。

……趣味でここにしたとかねえよな？……急に心配になってきたぞ、おい！！

「さあ、着いたよ」

考えている間に学園長室の前に着いたらしい。

「コンコン」

「高畑です、二人を連れてきました」

「うむ、入ってよいぞ」

という声を聞いた後にタカミチの後に続いて俺達は学園長室に入る。

「黒崎一護君、阿散井恋次君、ご苦労じゃった、そして黒崎君に至っては昨夜は巻き込んですまんかったのう」

そこにいるのは言うまでもなく学園長だ。

……やっぱ、ぬらりひょんにしか見えねえ……

そんな事を考えていると、俺の頭にある考えが浮かんできた。

…あれ？もしかして俺も老けたらこうなるのか！？

やべ…テンション下がってきた。

「フオツ！？いま途轍もなく失礼なことを考えられた気がするん」「気のせいです」そ、そうかの？

「それより、学園長本題を…」

「う、うむ…それでは早速じゃが…君たち二人にはこの度女子クラ

ス1-Aに入ってもらおうぞい」

「……………ん？今この糞じじい何か変なこと言ったよな？  
女子クラスに入れたと？」

「恋次…」

「ああ」

俺達二人は無言で斬魄刀を指輪（親父に、斬魄刀を収納する為に貰った）から取り出す。

「フオツ！？ち、ちよつと落ち着くんじゃっ！！」

「遺言なら後で聞きますが？」

「殺す前提なのかのう！？」

「勿論」

「まあまあ、落ち着いてくれ二人共」

まあ、タカミチが言うなら…ということで斬魄刀を指輪の中に戻す。

「ふむ…この度は男子と女子を共学にするかもしれないという計画が持ち上がったの？試験生として一クラスから二人の男子生徒を女子クラスに入れることとなったんじゃよ」

「で、俺達をつて訳ですか？」

「うむ、そういう事かのう」

「まあ、そういうことなら…」

と、恋次の方を見ると頷いてくる

「うむ、そういう事なら今日からで良いかの？」

「わかりました」

「ああ、後今日の午前0時に世界樹広場に来てくれんかの？」

「だが、断るっ！！」

「フオツ！？」

「冗談です」

その後、学園長室を出てタカミチにクラスに案内してもらった  
その途中でクラス名簿を見せてもらおうと…

「いや、可笑しいよな？このクラス！？」

祐奈からはじまりエヴァや茶々丸や昨日戦った女剣士や円…

これは仕組まれているとしか言いようがないな…

まあ、良いか…

「さあ、一護君、恋次君入ると良い…まあ一応言っておくけど…気を付けてね」

ん？なぜ気を付けなきゃいけないんだ？

まあ入ってみれば分かるか…

そして、扉を開けると…上から黒板消しが落ちてくる

へっ、この程度…あの修行に比べればっ…

楽勝だこの野郎っ！！

落ちてきた黒板消しを避け、ついでにバケツもキャッチする。

そして、足元に張られた紐を躲し飛んできたおもちゃの矢をバケツで受け止める。

「っっおおっっ！！！！」

驚きの声がクラス内に響く…若干二名、目を輝かせているが…悪い予感しかしねえ…

「はい、みんな座ってくれ」

「っっはい」

立って騒いでいた奴らをタカミチが座らせる。

「みんな聞いているとおもっが、この度男子と共学になるかもしれないということで男子の試験生を各女子クラスに二名編入させることになったんでね、うちのクラスは黒崎一護君、そして阿散井恋次君が入る事になった…さあ、二人とも自己紹介をしてくれ」

「黒崎一護だ、よろしく」

「阿散井恋次だ、よろしく頼む」

「っっ……………」

あれ？なんか俺達変なこと言ったか？

恋次も俺と同じことを考えているらしく、困惑した顔をしている。だが、この心配はどうでもよかったことがすぐに分かった…なぜなら…

「っっかつこいっっ！！！！」

クラスの大半の女子が悲鳴に近い叫び声を上げ、俺と恋次の鼓膜が破れそうになったからだ。

「ねえねえ、何歳？」

「いや、普通に考えて同い年だろ」

「拙者と勝負でござる！！」

「「忍者」だと？」

俺と恋次の声が見事にハモった。

「忍者ではないでござるよ？」

「その語尾直してから出直してこい」

と、周りが女子に囲まれカオスな状態になってきた…

そこに、「はい！！ここからは麻帆良のパパッチこと朝倉和美が皆の代わりに質問するよ」

と、一人の女の子がこの場を取り仕切り始める。

「ってか、パパッチって自分で言って良いのかよっ！？」

「そこら辺は気にしない方向で」

朝倉に俺がツッコむがあえなくスル…される。

……ってかさつきから祐奈からビシバシ殺気が籠った視線が飛んできてるんだが…

俺のせいじゃなくね？文句は学園長に言ってくれや…

まあ、別の意味で殺気飛ばしてきてる奴もいるけどな？

その方向を向くと予想通り昨日の女剣士が俺と恋次を睨み付けている。

はあ、面倒だから放っておくか。

「それじゃあ、最初の質問…！！二人とも彼女はいるの？」

「「いねえ」」

「そ、即答…って」

その後、朝倉からの質問が続きHRは終了した。

はあ…これから大変そうだな



(午前0時)

(タカミチside)

「学園長っ!!いくら英雄の子だからと言って遅れるのにも限度があります!!」

ガンドルフイ・ニ先生の言う通り…どうしたんだ一護君?

まさか本当に来ないつもりじゃ…?

「はあ?別に遅れてねえぞ?さっきからここにいるだろうが」

「なっ!?!」

あれは…明鏡止水か!?いつの間に…

しかも、

「わ、わしの後ろを取るのはやめてくれんかのう…」

ちやつかり学園長の背後を取っているし…

「さあ、一護君も来た事じゃし…早速始めるとするかのう?」

「なにすんだ?」

「力試しと言うことで…そうじゃな…刹那君と模擬戦でもしてもらおうかのう?」

「なっ!?!が、学園長っそれは!?!」

昨日の桜咲君と一護君の事があるというのに…何を考えているんだ学園長は…!!

「別に良いぜ?今日の朝からそいつに殺気ぶつけられっ放しでイライラしてんだ」

一護君も桜咲君を挑発するようなことを…

「私も構いません」

「うむ、では両者前に出てくれるかの?」

そして、一護君と桜咲君が前に出て向き合う。

さあ、どうなることやら…

(刹那 side)

また、こいつと戦うことになるとは…

だが、丁度いい…この間の決着をつけてやる!!

あの赤髪の男も邪魔することはできないしな……

真名が気を付けると言っていたが…昨夜程度の実力なら警戒する必要すらないな。

「昨日は運が良かったな？妖怪」

「そりゃどうも」

私は夕風を鞘から抜き放ち目の前の妖怪を挑発するが、まったく奴は動揺すらしていない。

「まあ、弱いやつ程よく吠えるって言うけど間違ってるねえかもな？」

「なん…だと!？」

くっ…落ち着くんだ…相手の挑発に乗っては冷静さを欠いてミスをしてしまう…

まずは…

「初めっ!!」

先手を取るっ!!

「斬岩剣っ!!」

私が放った斬撃はそのまま奴に向かって行く…

…？何故避けない!!？喰らえばただでは済まないぞ!？

そして、私の放った斬撃が奴を切り裂いた…

「そ、そんなっ!？」

まさか…そんなっ!？

「おい、何処見てんだ？」

「なっ!？」

切り裂いた筈の奴がいつの間にか私の背後に立っている。

「いつの間につ!!」

咄嗟に背後を切り裂くが…

「手応えが…無い？」

「そら、こっちだ」

くそっ！！ちょこまかとっ！！

「はい、お終いな」

そしていつの間にか私の首筋に後ろから剣が添えられている。

「…降参だ」

（一護 side）

やっぱこの程度か…

まあ、明鏡止水も見破れないのに鏡花水月を破れる訳ないか。

「そこまで！！…うむ一護君、桜咲君ご苦労じゃったな」

「はあ、つまんねえ事で時間使っちゃった」

早く帰って始解を覚えなきゃいけねえのに…

「…だ…と？」

「あん？」

「つまらないだっつ！！！！」

「ああ、つまんなかったな、自分の力も見極められない奴との戦いなんかつまらないとしか言いようがねえ…まあ、もっと強くなったら今言ったことは撤回してやるけどな」

悔しそうにしている桜咲を置いて俺は去っていった。

## 九話（後書き）

前話にbleachの男性キャラを出すということを書きましたが…  
予定としては

グリムジヨ - とウルキオラを出したいと思います。

出てくる時期は

グリムジヨ - はヘルマン編

ウルキオラは修学旅行編辺りで出したいと思います！！

後、感想お待ちしてます！！

## 十話（前書き）

獅子丸様、ノッポガキ様感想ありがとうございます！！

40000pv突破致しましたっ！！

皆さんありがとうございます！！

## 十話

あれから一年…

俺は恋次との修行で始解を手に入れた…

名前は斬月、能力は俺の魔力を喰って強力な斬撃、月牙天衝を放つというもんだ。

試しに威力を見てみようと思って別荘の海に月牙を撃ってみたんだが…

威力が半端じゃねえ…海が割れるって…どんだけだよっ!?

その後エヴァにももちろん怒られて氷漬けにされたけどな…

そして、今は卅解っていう始解の更に上の段階の修行をしている。

祐奈はというと、もの凄い成長速度らしい(エヴァが言うには)

強さで言ったら下手したら俺や恋次よりも強くて、魔法先生(タカミチと学園長を除く)よりも強いらしい。

そして、今は闇の魔法(マギア?エレベア)を習っている。

ちなみに、祐奈の魔法の属性は風と雷らしい…それが分かった時のエヴァの複雑そうな顔はなんだったんだ?

…まあ、良いか…

「おい、一護、そろそろ切り上げるぞ!」

「ああ、わかった」

恋次に言われ、修行を切り上げた。

そして、その後エヴァの家で朝飯を食って学校に行くのが普通になっ

ってきている。

まあ、寮があるっちゃあるんだが…

あそこはヤバイ…他の男共に「裏切り者には死をっ!!!」とか言

われて殺されかけたからな…  
文句は学園長に言ってくれて、マジで…

「それにしても祐奈の魔法の上達ぶりは凄えな」

「えゝ？そうかなあ？」

「そう謙遜することはないさ、この一年で上級古代魔法まで覚えるとはこの私も思っていなかったからな」

「えへへゝエヴァちゃんにまで褒められると何か照れるにやあゝ」と、祐奈は俺とエヴァに褒められ、まんざらでもなさそうな顔をしている。

「あつ！！そう言えばエヴァちゃん、雷の斧から繋げやすい魔法って何？」

「そうだな…」

エヴァと祐奈が魔法の話で盛り上がり始める。

俺には関係無い話だけだな…

理由は簡単、俺には魔法の才能が全く無いからだ…

魔力はかなり有るらしいが、才能の方はからつき駄目らしい…その証拠に火を灯す初級の魔法では、一時間経つても火すら出る気配が無かった…

…俺にはこの力が有れば充分か…

祐奈が強くなったとしても俺が守る…それだけは変わらねえ、いや、それだけで充分だ。

「何笑ってんだよ？気色悪いな！」

「んだと？喧嘩売ってんのか恋次？」

「本当のことだろうが」

「よし、齒あ食いしばれ…」

今にも殴り合いそうな雰囲気で見あふ俺達に「いい加減にしないか、この馬鹿共…まあ、どうしても氷漬けになりたいと言うなら止めはしないが？」

「け、喧嘩なんかしてないから氷漬けだけは勘弁して下さいっ！」「」

「分かれば良いんだ、分かればな？」

黒い笑みを浮かべるエヴァを見て、俺達二人はガタガタと震える。

俺達二人が氷漬けにされた回数は数え切れない…あれだけは……  
ヤバイ…震えが止まらねえ…  
そして、そんなやり取りをしていると、いつの間にか学校についた  
のでさっさとクラスに俺達は向かった…

(円side)

今日は珍しく高畑先生が出張じゃなくて、久しぶりにHRをしてる  
んだけど…

後ろを向いてあの人の方を向くと…

やっぱり…寝てる…

一護はいつもHRは寝てるんだよね…

…あ…明日菜が一護の所に歩いて行って…

そして、「起きなさいっ!!」

うわっ…痛そう…頭に思いつきり拳骨落とされてるよ…

「つつっ!!なにしがるっこの野郎っ!!」

殴られた一護が明日菜に向かって怒鳴る。

って言うか明日菜は女の子だから、野郎じゃないでしょ…

「あんたが高畑先生の話聞いてないからでしょ!!」

「眠いんだから仕方ねえだろうが!!」

「そんなの知らないわよ!!」

「…あゝ成程な…タカミチが話してるのを聞いてないとそんなに怒  
るのか…流石オジコンは違うな?」

「あんたちよつとっ!!それ以上言ったら…」

一護に言われて顔を赤くしながら慌てる明日菜を見ながら

…それじゃあ、一護が言った事を認めてるのと同じだよ明日菜…と  
心の中で溜息をつく。

でも、好きな人がいるだけマシかな?…私は…

ふっと、私の頭の中にあの時助けてくれた人の顔が浮かび上がる。

あの人も確か…黒崎一護って名前だったような…



でも、あそこにいる一護とはまったく違うんだよね…髪の色も違うし…目の色も違う…

もしかして…兄弟とか？それとも従兄弟？

うーん…聞いてみたほうが早いかな？

そんな事を私が考えていたら

「はい、じゃあHRは終わりにするからね？一護君と神楽坂君は喧嘩をしないようにしてね？」

「は、はいっ！！」

「へーい」

高畑先生が二人に注意してHRが終わっていた。

聞くなり…今しかないっ！！

「あ、あのさ…」

(一護 side)

面倒なHRが終わって俺はもう一度寝ようとする。

…畜生あのオジコンが…俺の睡眠を邪魔しやがって…

だが、寝ようとした俺に

「あ、あのさ…」

と、誰かから声を掛けられる。

声の方を向くと円がいた。

「ん？どうした円？」

「えーっと…変なこと聞いて悪いんだけど…一護ってお兄ちゃんとか従兄弟とかいるの？」

「…何でだ？」

多分、理由は分かる…

円はあの時の俺の事を兄貴か従兄弟だと思ってんだろ…

「何となくかな」

と、俺の方を向いて円が笑う。

……俺の事を教えたら嫌でもこっちの世界に引きずり込まれる…

教える訳にはいかねえ…巻き込まれるのは俺達だけで十分だ…だから…嘘をつく…

「あゝいるいる、何か随分前にこっちに從兄弟が遊びにきてさ…人助けをしたゝとか言ってたぜ？しかも俺の名前使ったとか言ってたさゝ」

「へゝ…そうなんだゝありがと、一護」

「おう」

……俺は礼を言われることは何もしてねえ…それどころか嘘までついたんだ…

この事が心のどっかに引つかかって今日一日は気分が悪かった…

（深夜）

侵入者が女子寮近くにいます。

その情報を聞いた俺は真っ先に女子寮に向かった。

狙いは俺と同じクラスの近衛木乃香、近衛は関西呪術協会の長の人娘でその体の中に膨大な魔力があるせいで関西の過激派の奴らに狙われているらしい…

祐奈と恋次は別のところで戦っていて、手の空いた俺がそこに向かうことになった…

「ったく…またお前らかよ…」

「そう固いこと言うなや、一護！また戦いあおうやないかゝ！」

「うつせえ、お断りだこの野郎！！」

そこにいるのは合計二十体程の鬼達、しかも大半が顔見知りだ。

「顔見知りだからってここは通さないぜ？」

「んな事は解ってるわい」

「そんじゃあ…始めるとするか！！」

指輪から斬月を出しながら妖怪化し、近くにいた鬼を切り裂き

「月牙天衝っ！！」

そして、そのまま月牙天衝を前にいる鬼達に放つ。

「ちよっ！？いきなり半分も減らすなんて反則…」

「勝負に反則も糞もあるかつ！！」

攻撃を鏡花水月で躲しながら次々に鬼を切り裂きながら怒鳴る俺の耳に

「一護…？」

ここにいてはいけない奴の声が届く…

「なっ…な、なんでお前が…？」

そこにいるのは円だった…

## 十話（後書き）

祐奈の始動キ-が思いつかない（泣）

誰か良い始動キ-を考えていただけると嬉しいです。

感想お待ちしております！！

## 十一話（前書き）

更新が遅くなってしまい申し訳ありません…

碧の軌跡をやるのに夢中になっていてすっかり忘れていました…

reina様、感想及び始動キ・の案をくださりありがとうございます！！  
ました！！

p v 5 0 0 0 0 突破、ユニーク 1 0 0 0 0 0 人突破致しましたっ！！  
ありがとうございます！！

## 十一話

(円side)

「なっ…な、なんでお前が…?」

そう言ってこつちを驚いた顔で私の方を見てくる。

その人は月の光を浴び、手には出刃包丁みたいな大きな剣を持っている。

その人の顔はあの時私の頭から一回も離れた事は無かった。

「えっと…」

「何でここにいんのかって聞いてんだよ!!」

急に怒鳴られて、私の体がビクンッと跳ね上がる。

「ここは危ねえから…下がってろ」

そう一護が言ったと同時に体の周りから黒い炎みたいなものが立ち上ってくる。

「おい、テメエら…悪いが本気で潰しにかかるぜ…」

その言葉と共に一護の姿が私の前から消えた…

「消えた!?!」

「気いつけや!! 明鏡止水や!!」

周りにいる鬼(?)達が警戒して周りを見回している。

「どこ見てんだ?」

その声と共に一匹の鬼が切り裂かれる。

「えっ…?」

一体…何が…どうなってるの!?

私は自分の目の前で起こっている事に夢中になっていて、後ろにいる何かに気づく事が出来なかった。

「悪いのう、お嬢ちゃん…」

「だ、誰…」

後ろを見た私の目には、鳥のような妖怪が立っていた…

「助け…」

一護に向かって叫ぼうとした私のお腹に鈍い衝撃が走って、私は意識を手放した。

(一護 side)

…おかしい…こいつらの戦いかた…  
まるで、時間を稼いでる感じだな…

「おい、何のつもりだ？ そんなんで俺を倒せると思ってたのかよ？」  
「まさか、そんな訳ないやろ？ ワシらは時間を稼げば勝ちやからな」

やっぱりか…

そこで俺は気付いた…数が一匹足りないことに…  
しまったっ！！こっちは陽動かよ！！！！

慌てて後ろを向いた俺を新たな驚きが襲った…  
それは…

「はあ！？ 円がいねえ！？」

落ち着け…落ち着け、俺！！

こいつらが円を連れて行った理由がまず分からねえ…

「おい、一護！ 後ろのお嬢ちゃんはどこ行ったんや？」

「は？ お前らが連れて行ったんだろ？」

「何言つとんのや？」

「……………」

おいおい…まさか…

「勘違い…やな…」

「何、他人事みてえに言つてんだっ！！」

「今思えば、あいつ色々抜けとるからのう…黒髪の女の子としか言われなかったから…間違ったんやな」

「良いのか！？ それで！？」

俺のツッコミがその場に虚しく響き渡る。

「ツッコミ入れてる場合じゃないでしょ？ 一護！！」

そこに聞き覚えのある声が響き

「ラド？ドラド？カドア？カランドリア、来たれ雷精、風の精！！  
雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐！！雷の暴風っ！！」

鬼達を雷を纏った旋風が飲み込んでいった。

「ナイスタイミングっ！！祐奈！！」

「ここは私と恋次に任せて早く円を助けに行くっ！！」

「ああ！！ありがとう！！」

その場を祐奈達に任せて、俺は鬼を召喚した術者を捜しに行った。

（祐奈 side）

「しっかし…多いな…こりゃあ…」

「あれ？恋次君はヒビっちゃったのかにゃ？」

「んな訳あるか！！ただ…」

言葉を切り、恋次は笑みを浮かべて続ける。

「倒し甲斐があるじゃねえかよっ！！」

そう叫んで恋次は鬼達の所へ飛び込んでいく。

うゝん…恋次のあの戦い好きはなんとかならないのかな？

そんなんだから「赤き闘神」なんて呼ばれるんだよ…

「あははは…しゅーがない…私も大切なクラスメイトを守る為に頑張っちゃおうかにゃ？」

（侵入者 side）

くそっ…まさかここまで鬼共が使い物にならないとは予想外だ…

しかも、よりによって無関係の者を連れてくるとは…！！

「仕方があるまい…始末を…」

「コッっコッっ…」

その時、私の耳に聞き慣れない足音が届いた。

追っ手か…？まあ、良い…予想範囲内だ…

そして、足音が聞こえた方を向いた…



…なんだと…？

誰も…いない？

だが、足音はこっちに向かって真っ直ぐ向かって来る。

喉が勝手に干上がってくるのがわかる…

「な、何者だっ！？」

「それはこっちの台詞だ、この野郎」

何も無い虚空から、若い男の声が聞こえてくる。

「ってかよ…今聞き捨てならねえ事言つたよな teme ？ …… 始末するだったか？」

その言葉と共にどこからか発されている圧力が更に強くなる。

「そ、それがどうした！？」

「認めた…って事で良いんだよな？」

そして、声の主が姿を現わした。

その姿は、人間のようで、異形のようにでもあった。

「貴様が…噂に聞く静寂の暗殺者が…」

音も無く虚空から現れて、式神を切り裂く姿は静寂の暗殺者と呼ばれ、恐れられていると聞いたが…まさかこんな子供とはな…

まあ、良い…ここで消してしまえばいい話だ。

「疾っ！！」

私が放った符から出た炎が目の前にいた男を飲み込んで行く。

無論、後には塵一つ残っていない。

「はははははっ！！こゝん「随分とご満悦そうじゃねえか？」な、なにっ！？」

炎に飲まれて死んだ筈の男がいつの間にか私の後ろを取っている。

「なぜだっ！？何故生きている！？」

「何故って…決まってるだろ？あそこに俺はいなかったって事さ」

さも、当然のようにこちらを向いて言ってくる。

「なにを…言っているっ！？」

「まあ、お前には一生かかってもわからねえだろうがな…」  
その声と共に刀の峰で顔面を強打された。

…ナゼダ？

ナゼ、コノ私がコノヨウナトコロで…？

「てめえの敗因はただ一つ…俺の大切な奴に殺意を向けたことだ…  
よく覚えとけクソ野郎…」

そして、私は意識を手放した。

(一護 side)

終わった…か。

さつき見た感じだと、円はそんなに酷い怪我はしてねえみたいだな…

「ん……………」

「おっ？気が付いたか？」

「あ、あれ！？あの鳥は！？」

「鳥？…大丈夫だろ…たぶん」

そして、その場に沈黙が流れる。

…気まずい…どう説明しようか…

「助けてくれてありがとう、あなたって一護の従兄弟なんでしょ？」

「…違う…俺は…」

そう言っただけ俺は妖怪化を円の前で解いた。

「…え……………っ!？」

円の瞳が驚きで見開かれる。

「俺は…お前に嘘をついた…今ここに居る俺は従兄弟なんかじゃねえ…真正正銘の…黒崎一護だ」

## 十一話（後書き）

感想お待ちしてます!!

## 十二話（前書き）

雪門様、reina様、感想有難う御座いました！！  
pv60000突破致しましたっ！！

## 十二話

俺は今、円を連れてエヴァの家に向かっている。

まあ、無理もないか…

どこか、呆然としている円を見ながら俺は思った。

正体をばらした後に魔法の事や俺の事を簡単に説明した。

なにせ、意味も分からずに巻き込まれて、その次は魔法があるって話と、俺が円が知ってる黒崎一護だって言われたら誰でもあなるよな…

そんな事を考えていたら、いつの間にかエヴァの家の前に着いていた。

「ここは？」

「言ってなかったか？ここエヴァン家たぞ？」

「えっ！？エヴァちゃん、こんな所に住んでんだ…道理で寮で見ない訳だ…」

「あいつは基本自由だからな…」

と、俺が苦笑しながら扉に手を掛けようとする前に

「GOOD EVENING、一護〜！！」

と叫びながら俺に親父が飛びかかってくる。

「やかましいっ！！」

煩わしいから親父の顔を渾身の力を込めて蹴り飛ばす。

「ゴパアツ！？」

変な声をあげて親父が吹っ飛んでいくが、シカトしてエヴァの家の中に入る。

「大丈夫…なの？」

「あれぐらいじゃくたばらねえよ、なにせGみてえなしぶとさだからな。」

「G扱って…はあ…」

別に円が溜め息をつく必要ねえと思うんだが…？

「全く…もう少し静かに入ってこれんのか…？」

「うつせ、ゼルダやりながら言われても説得力ねえよ…！」

「ふっ、これの良さが分からないとは、まだお前も子供だな一護？」  
「そういう事を言ってんじゃねえっ…！」

しかし、600歳で見た目子供の女の子がゼルダに夢中って…シユル過ぎる…

「むっ？そう言えば、何故ここに釘宮がいるんだ？」

「祐奈と恋次に聞いてねえのか？」

あの二人が言い忘れる訳ねえんだけどな…

「祐奈さんと、恋次さんは確かにマスターに言っていました…ただ…ただ？」

茶々丸に聞き返すと

「ゼルダに夢中で恐らく聞いていませんでしたが…」

「ニートかよ…orz」

「ニートでは無いっ…！ちゃんと働いているだろうが…！」

自覚がねえか…可哀想に…

「と、とにかく別荘に行くぞ…！あいつらも待っているだろうからな…！」

「逃げたな」

「逃げたね」

「ご心配無くマスター…逃げたとしても私はマスターの味方ですの  
で」

俺達の放った言葉でエヴァの顔が赤くなっていく

「逃げていなくいつ…！」

「どうどう」

ムキ…とこっちに向かってくるエヴァを軽くあしらう。

「ああ…マスターが喜んでいます…！！」

「どこをどう見たら、そうなるんだこのポケロボがあっっ…！巻いてやる、巻いてやるぞおおっっ…！」

「ああ、いけませんマスターっ…！そんなに巻かれては…っ」

エヴァと茶々丸は放っておいてよさそうなので先に円を別荘の中に案内することにした。

「うわ〜っ!!何、ここ!？」

別荘の中の光景を見て、円は素直に驚いている。

「まあ、驚くのも無理はねえよ、俺も最初は驚いたからな」

そんなことを話していると、遅れてエヴァと茶々丸、そして親父が入ってくる。

それに気付いた恋次達がこっちに来て、一応全員集合した。

「それでは…まずは釘宮」

「は、はい!」

緊張しているのか、少しもっていたが大丈夫か？

「率直に聞こう…覚悟はしているんだろうな？」

「うん、魔法の事を知ったからこそ、一護を助けたいって思った…だから覚悟ならあるよ!!」

「良いだろう、お前もミツチリ鍛えてやるからそのつもりでいろよ？」

…気のせいかな？エヴァの笑みが滅茶苦茶怖かったんだが!？

「よし…次は俺から話がある。」

「親父が？」

親父の真剣な顔をみながら聞く。

だが、俺は知っている…こいつが真剣な顔をする時はどうしようもない程のオチが着くという事を…本当に嫌という程に知っていた…

「仮契約しろ、一g「取りあえず死ね」ゴパアツ!？」

仮契約つてのが何かは知らんが…ロクでも無さそうだから取りあえず殴っておく。

「仕方ない…私が説明してやろう…仮契約というものは、それをする事によって強力な魔法具が手に入るといふ儀式だ。」

「へ〜だったらしようよ一護!!」

「うん、そういうのがあれば足手まといにならなくて良いかも…」  
祐奈と、円が乗り気になってやがる…

だが…

「どうやるんだ？それ？」

「決まっている、キスをするんだ。」

……………は？

「「えっ！？／＼／」

おい…今こいつさらつと、とんでもない事言いやがらなかったか！？

「そ、そんなっ…まだ心の準備が／＼／」

「き、キスって…／＼／」

いや…そんなに嫌がられると、何か凹むな…

「嫌なら別に」「嫌じゃないっ！！」「…なら良いんだけどな」

「たく…嫌なのか、良いのかはつきりしろつつの…」

そんな事を考えていると

「準備出来たぞー一護」

いつの間にか親父が何やら魔法陣らしきものを描き終わっている。

「何してんだデメエっ！！」

「なんだ一護？照れてるのか？」

「て、照れてねえっ！！」

いや…でも二人共可愛いし…って！？何考えてんだ俺っ！？

「ヒュゝヒュゝ熱いねゝここだけすげえ熱いんですけどゝ」

「一遍死んでみるか？恋次！！」

こいつはそういう噂聞かないんだよな…何でだ？

「一護…もうとつくに二人共準備ができているんだ！！さっさとしないか！！」

エヴァに怒鳴られしぶしぶ陣の中に入る。

「えっと…私が最初だから…よろしくね？／＼／」

「お、おう…／＼／」

最初は祐奈とみたいだな…

……………あゝっ！！恥ずかしいっ！！さっさと済ませるか！？

そして、俺と祐奈の唇がゆっくりと近づき…重なる。

その後、そこにカ－ドのような物が出てくる。



今の俺にはそれを見る余裕すらなく、とっさに後ろをむく…  
だが…再び俺の唇が誰かに塞がれる…

「!?!」

「む、向き合ってたど…恥ずかしいから…//」  
それをしたのは言うまでもなく円だった。

(第三者 side)

仮契約を済ませた一護達は、恥ずかしかったのか今だ顔が少し赤い。

「よし、カードは持ったな?二人共」

「うん!!」

エヴァからの呼びかけに元気に答える円と祐奈。

「それでは、アデアット(来たれ)と言ってみろ」

「アデアット!!」

その声と共に、円の手にはハ・プが祐奈の手には二丁の銃が現れる。

「へへっすげえな」

それを見た一護が感嘆の声を上げる。それに反してエヴァと茶々丸は啞然としてそれを見ている。

「……………」

「な、なにか変かな?」

と、祐奈が二人に尋ねる。

「いや…祐奈のア・ティファクトは至って普通なんだが…釘宮のア・ティファクトがちよつとな」

とエヴァが円に視線を投げかける。

円の方は困惑した表情で「え?私のがどうしたの?」とエヴァに聞く。

「なんだ?そんなに珍しい物なのかよ?」

「ああ…それはオルフェウスの豎琴と言ってな…ア・ティファクトの中でも珍しいマスター・ピース級の物だ。」

「ほう…マスタ・ピースか…中々レアだな」

エヴァの説明に興味深そうな反応をする一心。

「どういう風に使えばいいの？」

「とりあえず弾けばわかるさ」

「え！？私、豎琴なんか弾いた事ないよ！？」

「問題ない…お前の頭の中にどう弾けば良いか浮かんでくるはずだ」  
そう言われ、豎琴に円は手を添えて弾き始める。

「」

豎琴など、一度も弾いたことのなかったはずの円から心が洗われる  
ような音色が紡ぎ出される。

そして、

「………おっっ！！！！！！」「……」

演奏が終わると同時にそこにいる全員から自然に拍手が送られる。

「ほんとに頭の中にどう弾けば良いか浮かんできたよ！！すごいす  
ごい！！」

「まあ、その本質はそこじゃないんだ…その本当に凄いところ  
は…回復、解呪、身体強化の能力を音色によって出せるという事だ。

「」

「…なるほどな…そういう事が…しかし、あの馬鹿がかけた呪いだ  
ぞ？大丈夫なのか？」

「ふっ…甘く見るなよ、一心…これはどんな呪いも解呪できる性能  
からマスタ・ピースになっているんだ」

エヴァと一心の話についていけない一護達四人は取り残された  
ような表情を浮かべている。

「えっと…私たちにも分かるように言ってくれる？エヴァちゃん」  
「なに、簡単な事だ…釘宮、私に掛かっている呪いを解くんのだ」

## 十二話（後書き）

恐らく、次回は正義の魔法使い達と一護達がおもめです。

感想お待ちしてます！！

### 十三話（前書き）

テスト勉強が忙しく、中々更新できずいませんでした！！  
まだテスト終わってないんですけどね（笑）

reina様、支配者様、感想ありがとうございました！！

p v 7 0 0 0 0 突破致しました！！

ありがとうございます！！

## 十三話

「呪いを解くって・・・んな事出来んのかよ?。」

「うゝん・・・出来るか分からないけどやってみるよ。」

そう言つて円が、豎琴の弦に手を添えて、音を奏で初めた。

その場に再び、さっきとは違った音色が響き渡る。

「・・・ん?・・・おわあぁっ!？」

その時、恋次が何かに気付いたような声を上げ、その後、驚いたように叫んだ。

「どうした!? 恋次・・・って、うおっ!？」

恋次の方を向いた俺の目に飛び込んできたのは・・・

「む・・・? どうしたお前ら?」

エヴァの体の周りにまわりついていて、いかにも呪いの精ですつて感じのものだった。

「それは、こっちの台詞だっ! ！まず、お前がどうしたっ!？」

あまりの驚きに俺と恋次のツツこみが見事にハモった。

が、「うるさい! 集中できないから静かにするっ!」

と、円に一喝され、俺達は即座に黙る。

「にやははっく一護、怒られてる」

「うっせ! 放つとけ! ！」

裕奈にからかわれ、俺は裕奈を睨んだ。

そして、5分後・・・

「ついに・・・ついに、呪いが解けたっ! ！そうだ、この感じだ! ！失われていた力が戻って・・・ん?」

喜んでいたはずのエヴァの顔がキョトンとした顔になる。

「ん? どうしたんだ? エヴァ?」

「半分しか・・・戻ってない・・・だと?」

は? 呪いは解いたのに、何で力が半分しか戻ってねえんだ?

「エヴァの日頃の行いが悪いからじゃねえの？」

「んな訳あるかつ!!」

「分かってるって、冗談、冗談」

だとすると・・・

「あの爺さんが何かしたんじゃねえのか？」

「ふむ・・・確かに、あのジジイならやりかねんな・・・」

そうだよな・・・俺もあの爺さんは、何かあんまり好きじゃねえんだよな。

「よし・・・あのクソジジイをちよつと締め上げてくるとするか・・・」

そう言つて黒いオーラを纏いながら笑みを漏らしていた。

「「「「「怖っ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

その場にいた全員がそれをみて恐怖を抱いていた。

(あ・・・爺さん、死んだんじゃね?)

俺の頭の中に爺さんがエヴァに締め上げられて死にそうな状況がありありと浮かんでくる。

「おい、一護これからどうするんだ？」

「どうするって何をだよ親父？」

「何って・・・エヴァの呪いを解いて正義の魔法使い(バカ)共になんて言つ気だ？」

あゝ・・・そうだ、すっかり忘れてたな。

「ま、なんとかするさ」

(その日の夜)

予想通り呪いを解いた事がバレて俺とエヴァと恋次は学園長に呼びだされた。

「さて・・・説明してもらえるかのう？」

エヴァに締め上げられたようで、包帯を頭に巻いている学園長が俺

達に尋ねてくる。

「君達は、一体どういつつもりなんだ！？あのエヴァンジェリンの呪いを解いてしまおうとは！！」

正義の魔法使いの一人、ガンドルフィーニが、険しい声色で俺達を問いただしてくる。

「どういつつもりって言われてもな・・・ってか、大体あの呪いつて3年たったら解く約束なんだろう？」

「それは・・・」

口後盛るガンドルフィーニに更に追い討ちを掛けるように言う

「なのに、実際は3年以上ここに縛り付けて・・・正義の魔法使いが嘘言つて良いのかよ？」

「奴は、悪の魔法使いだ！！縛り付けるのは当然だ！！」

はあ・・・出たよ、正義の奴等の戯言が・・・

「哀れだな・・・その正義が間違つてんのも知らねえでさ」

「間違いですって！？一体、何処が間違いだと言うんです！？」

ガンドルフィーニに変わって、高音が俺に喰って掛かって来る。

「大体、貴方もお父様と同じように偉大なる魔法使いマギステル・マギ）を目指しているのではないのですか！？」

「は？いつ俺がそんな事言つたんだよ？ってか、第一、親父はマギステル・・・なんだっけ？まあ良いか、それにはなつてないし」

「「なっ！？」」

お？この反応を見ると、どうやら知らないみてえだな・・・

「な、なぜ？」

「本人曰く、「面倒臭えんだよな、そういうのは・・・ってか、俺はあんなになる為に戦つた訳じゃねえしな。」って、言つてたぜ？」

俺が、そう言うのと周りの正義の魔法使い達が動揺し始める。

「ふん、なんだ？貴様らが想像していた、一心と実際の一心と違ってシヨックだったのか？」

動揺している正義の魔法使い達を見てエヴァが小馬鹿にしたような

笑みを浮かべる。

「黙れっ！！貴様のようなg「おい・・・」なんだ？・・・ヒッ！？」

一人の名前も知らない正義の魔法使いがエヴァに言おうとした事が分かり、自然と殺気をそいつに向けた。

「別に、俺や親父を馬鹿にするのは構わねえ・・・だがな、こいつは・・・エヴァは、俺の家族みてえなもんなんだよ・・・家族を馬鹿にするってなら・・・それなりに覚悟決めるよ？って、聞いてねえか」

殺気を当てすぎて、泡を吹いて気絶している奴を見ながら呟く。

「フォッ、フォッ・・・ちと、やりすぎかのう？この年寄りには、強い殺気じゃったのう」

「悪い、忘れてた」

「忘れてたって・・・まあ、一護君らしいけどね」と、タカミチに苦笑いされる。

「ってか、俺らしいって何だよ？」

「まあ、エヴァも卒業するまでは大人しくしておるらしいし、この件はこれで終わりじゃ」

「で、ですが・・・」

「異論は認めん、解散じゃ！」

学園長の鶴の一声によって、渋っていた奴等も帰って行く。

「はゝ、疲れたぜ・・・俺達も、とっとと帰ろうぜ」

「ああ、そうだな」

俺の言葉に、今まで口を開いていなかった恋次が答える。

「ってか、何でお前今まで喋んなかったんだよ！？」

「いやゝ一心さんに、この件は一護一人にやらせろって言われてなああの馬鹿親父・・・こっちは大変だったの！！」

「おい・・・一護・・・」

「ん？どうした？エヴァ？」

学園長室から出ようとした俺をエヴァが呼び止める。



「その・・・あれだ・・・家族と言ってくれてありがとう・・・」  
／／

「いって、気にすんなよ」

「ふ、ふん！言われ無くても気にしないさ！！」

そして、何故か顔の少し赤いエヴァと一緒にエヴァの家に戻った。

## 十三話（後書き）

感想お待ちしてます!!

## 十四話（前書き）

雪門様、感想ありがとうございました！！  
漸く、ネギの登場です。

## 十四話

そして、エヴァの件からしばらくした後、再び俺達は学園長に呼び出されていた。

「で？何か用かよ？爺さん？」

「ふむ、実はん「断る」まだ何も言っていないんじゃないやがのう！？」  
どうせ、ろくでもねえ事だろ？

「なんか、ワシへの扱いが酷い気がするんじゃないやが…」

そう思わんか？タカミチ君…」

「アハハハ…」

急に爺さんに話を振られ、タカミチが苦笑する。

「まあ、さっきのは冗談だから…で？」

「実はのう、今日からネギ・スプリングフィールドと言う新しい教師が来るんじゃないやがのう…その子の世話を頼みたいんじゃないや」

は？生徒が教師の世話…だと？

「爺さん…ちなみに聞くけどよ…そいつ、何歳だ？」

「10歳じゃが？」

爺さんから、発せられた言葉に俺達の思考が一瞬フリーズする。

そして…

「「はあ！？」」

「いや！？常識的に考えて駄目だろ！？10歳だぞ！？まだ小学生じゃねえか！！」

「わしらものう…正直戸惑っておるんじゃないやよ…卒業試験とはいえちよつと無理があるしのう」

なんか、また面倒臭そうだな…

「まあ、理由はどうあれ…お断りだ…そこら辺の正義の奴らに任せらんだな」

そう言っただアに手をかけた瞬間…

「ちよつと、どういう事ですか、学園長先生！？こんな子供が先生

って!？」

という聞き覚えのある声と共に、ドアが凄まじい勢いで開き、そのままの勢いで俺の顔にぶつかる。

「痛えっ!？」

顔を押さえてしゃがみこんでいる俺の隣で恋次が必死に笑いを堪えている。

「あ…黒崎いたんだ」

「いたんだ…とは随分失礼な事言いやるな？」

こいつは神楽坂明日奈、俺のクラスメイトで中学生なのにタカミチが好きという所謂オジコンってやつだ

「一護くんやゝおはよゝ」

「おう、おはよう」

こつちの奴は近衛木乃香、爺さんの孫らしい…らしいって言ったのはどう見ても似てねえからだ…特に頭の辺りが…

そして、その後ろにいる子供が恐らく話に出てきた、ネギ? スプリングフィールドだろうな…見覚え無い顔だし…

だが、そんな事より気になるのは…

「神楽坂…何でジャージなんだ？」

「何か分かんないけど、そいつがくしゃみしたら制服が吹っ飛んだのよ!！」

おいおい…何、普通に魔法使ってたこいつは…秘匿という言葉を知らねえのか!？」

「ご苦労じゃったのう、木乃香に明日奈ちゃん、教室に戻って構わんぞ」

そつちの二人も良いぞ、と爺さんが思い出したかのように付け加えた。

ドアを開けるといつもの2ーAの光景が広がっていた。

例として挙げるなら、今日もせっせとトラップ作りに励む双子とシスターや、ジャグリングを披露しているピエロとかだ。

…毎回思うがこのクラスは変なの集まりすぎだろ!?

「あ、おはよー黒崎く今日は明日奈と木乃香と来たんだ?」

「何か、凄え誤解を招くような言い方しやがるな…記事とかにすんなよ、朝倉…」

わかってるって…という返事を聞いてもまだ不安だ…

それに…

裕奈と円にももの凄いジト目で見られてる気がするが…俺のせいかな!?

「そういえばさ…新しい先生が来るって本当?」

「どっから、そんな情報仕入れてくんだっつの…まあ本当だけだな」

「へえ…どんな先生?」

どんな…か…10歳だとか、魔法使いだとか…言えねえ…

「ちよつと変わった人だぜ」

こう言うしかねえよな…

そして、俺がそう答えると同時にチャイムが鳴り、雪広が座るように指示を出す。

そして、全員座り終えたところを見計らったようにしてドアが開いた。

まあ、当然黒板消しがそいつの頭に落ちて来る訳だが…

俺の予想通り、ドアを開けたのはネギ・スプリングフィールドだった。

そして、黒板消しがネギの頭に直撃…せずに数センチ手前で何かに阻まれるようにして浮いている。

……………ん?

あいつ…まさか魔法障壁を解いてねえんじゃ!?

ネギの方もそれに気付き、慌てて魔法障壁を解き、黒板消しが頭にヒットした。

それから先は酷いもので、全てのトラップに引っ掛かり、最後は、

どういう原理で落ちて来たのか、金ダライがヒットし、目を回している。

……1年前のトラップにタライってあったか？

あいつら…トラップを強化しやがったな…

笑っていた周りの奴等も子供だと分かると、心配をし始める。

そして、復活したネギが気を取り直して教壇に立つ。

「これから皆さんにまほ…英語を教えるネギ？スプリングフィールドです、これから宜しくお願いします。」

……今、あいつ絶対魔法って言おうとしたよな！？

本当にこいつ大丈夫かよ…

まあ、その後もやらかしてくれたぜ…

例えば、宮崎が本を持ち過ぎて階段を踏み外したのを俺が見かけて、縮地で間一髪で助けた目の前でネギが杖を構えて、いかにも、今から僕、魔法を使いまゝすみたいなの雰囲気をも出ししていた。

まあ、俺に見られたただけなら良かったんだが…神楽坂にも運悪く見られていて、1日で魔法使いとバレるという、まさかの事態を引き起こした。

ん？俺はだつて？

勿論、神楽坂に「あんたも、魔法使いでしょ！！」

と言われたが、「あれは、縮地つつう技だよ、魔法なんていうオカルトじゃねえ」

という言い訳で回避した。

エヴァにもしもの時に教えて貰った言い訳が役にたったぜ…。

後、また神楽坂が服を（下着も）吹っ飛ばされたのは、完璧な余談だ。

俺は悪寒がしたから見なかったけどな…

その後も、タカミチ相手に読心術使ったり、惚れ薬を作ったりなど色々でかしやがった。

惚れ薬は裕奈と円が大事になる前に処理したらしい。

大変だなゝあいつらも…

俺のネギに対する印象はトラブルメーカーだ。

そして、このクラスにとっての最悪の日、テストが近付いてきた。その日が近付いて来るに連れて、クラス内にある噂が広まっていた。

それは……今回のテストで最下位だったクラスは小学生からやり直していつもだった。



## 十四話（後書き）

感想お待ちしてます!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0699w/>

---

魔法先生ネギま！ 畏を継ぎし死神

2011年11月24日18時56分発行